

令和6年度小学校教科教育推進研修（国語科）研究成果物（指導について）

指導者 Bグループ 広島県立尾道特別支援学校 吉川 京香
指導学年 第1学年 2名

1 単元名及び教材名

じどう車カードを つくろう 「じどう車くらべ」（光村図書「こくご1 下巻 ともだち」）

2 児童観

本学級の児童は2名で、聴覚障害がある。主なコミュニケーション手段は、手話と指文字と音声である。

A児は、耳から入る情報が少ないため語彙が少なく、発音も不明瞭である。また、経験した状況、知っていることや物を手話や身振り手振りで表現することは出来ても、語彙が少ないため、その状況や物の名前を言葉で表現できないことが多い。こうした語彙の少なさのため、文章を読む際にも意味を理解できない言葉が多く、文章の内容理解が難しい。したがって、1つ1つの単語や言い回しの意味を確認し、理解できていない場合は、手話で表す、写真やイラストを見せる、実際に経験させる等、意味を理解させるための手立てが必要である。また、A児自身が経験したことを伝える際には、手話や身振り手振り、指さしを使って伝えることはできるが、文や文章にすることは難しい。A児の手話等を指導者が読み取り、指導者が助詞を付け加える等しながら、一緒に文や文章を作る必要がある。

B児は、文章を読む際、A児に比べてすらすらと読むことができるが、言葉そのものを覚え間違えていたり、正しく意味を理解できていない言葉があったりする。そのため、A児と同様、言葉の意味を理解できているか確認する必要がある。また、B児は抽象的な事象の理解が苦手であるため、言葉を言葉で説明するより、実際にB児が経験したことがある状況を思い起こさせたり、身近な人や場面で例えて話したりする必要がある。経験したことを話すことは好きであるが、指導者から質問の意図に沿って答えることが苦手であるため、A児に先に答えてもらったり、指導者が答え方の例を示したりする必要がある。

本単元に関する学習としては、これまでに、説明的な文章の「つぼみ」を読み、「問い」と「答え」の関係を捉え、重要な語や文を見付ける学習をした。「問い」と「答え」を抜き出すことはできたが、「つぼみのようす」と「はなのさきかた」と「さいたはなのようす」の関係を捉えることが難しかった。また、文章のみでの理解は難しく、動画や写真の様子と言葉や文、文章を結び付けながら言葉の意味を理解させる必要があった。文学的な文章の「おおきなかぶ」を読んだ際には、幼稚部の時に他の幼児や教員と力を合わせて野菜を抜いた経験を話すというように、文章の内容に結び付く経験を想起することができた。しかし、自分の経験や知識と文章を結び付けて解釈し、文章の内容に対する思いをもつことまでをねらう「考えの形成」を指導事項として取り上げた学習はまだ行っていない。自分の経験を思い起こすことは得意ではあるが、解釈をすることは難しいと考えられるため、文章の内容と自分の経験との共通・相違に着目させ考えをもたせる必要がある。

特にA児は、乗り物に興味があり、進んで乗り物の本を読んでいる。B児は乗り物にあまり関心はないが、乗用車やバスに乗る機会が多く、どのような場面で乗ったのかを話すことが多い。しかし、「しごと」や「つくり」について話すことはないため、教材文の事例に用いられている自動車の「しごと」や「つくり」を整理する過程で、児童自身が見つけた「しごと」や「つくり」について聞き出す必要がある。また、写真や動画などがあるとそこから情報を見つけ、文章の内容理解につなげることが出来るため、実際に児童が乗っている車やバスの写真を提示する必要がある。

3 指導観

指導に当たっては、文章の内容の理解を基に、考えの形成を行えるように単元を構成する。

内容の理解について、「考え聞かせ」を行い、児童に問いかけながら読むことで、「しごと」「つくり」「そのために」など、普段使い慣れていない言葉の意味を理解させる。また、挿絵や自動車の本の絵を指さしながら「つくり」を確かめることで、文章と想起された自分の知識や経験を結び付けることができるようにする。「しごと」と「つくり」の関係を捉えさせるために、ワークシートの中で矢印や「そのために」という言葉を用いて関係を示す。

「考えの形成」については、自動車についての自分の経験や知識を想起させる。単元の始めに、自動車についての経験や知識を自由に話す時間を設ける。実際に児童が乗っている車やバスの写真

を提示しつつ、他の児童の経験を聞くことで、さらに経験や知識を引き出すことができるようにする。また、考え聞かせの時間にも経験を引き出し、写真・文章・経験を結び付けたものを掲示物として残すことで、「考えの形成」の際の手がかりとする。「考えの形成」の解釈の部分では、「ぶんしょうのないよう」「けいけんしたこと」「わかったこと」「かんそう」の枠を分けたワークシートを用いて、児童が文章を読んで考えを形成する力を確実に身に付けられるようにする。

4 指導と評価の計画（全12時間）

次	時	学 習 内 容	評 価			
			知	思	主	評価規準・ 評価方法 等
一	1・2	学習の見通しをもつ。 ・自動車について、児童の経験を想起させ、自由に交流する。 ・範読を聞き、感想を交流する。 ・これまでの学習の流れを参考に学習計画を立てる。				
	3・4・5	「じどう車くらべ」を読み、「問い」と「答え」の関係、「しごと」と「つくり」の関係を整理する。 ・それぞれの自動車ごとに、ワークシートにまとめ、全体構成を捉える。				
二	6	教材文の事例に用いられている3つの自動車のうち、2つの自動車を取り上げて共通点・相違点を整理する。	○			〔知識・技能①〕 <u>じどう車カード、発言</u> ・共通、相違など情報と情報との関係について理解している。
	7・8 (本時)	自動車について、児童が乗ったことのある車における経験と結び付けて解釈し、感想をもつ。		○		〔思考・判断・表現②〕 <u>じどう車カード、発言</u> ・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもっている。
三	9・10	乗り物に関する本を読み、じどう車カードにまとめる。 ・自分の調べたい乗り物を決め、本を使って調べる。 ・調べたことを「しごと」と「つくり」に分けて、ワークシートにまとめる。		○		〔思考・判断・表現①〕 <u>じどう車カード、発言</u> ・「読むこと」において、文章の中の重要な語や文を考えて選び出している。
	11	自分が調べた自動車について、児童が乗ったことのある車における経験と結び付けて解釈し、感想をもつ。			○	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 <u>児童の様子</u> ・粘り強く、文章の内容と自分の体験を結び付けて、自分の考えや感想を自動車カードにまとめようとしている。
四	12	学習を振り返る。				

5 本時の学習（7／12 時間目）

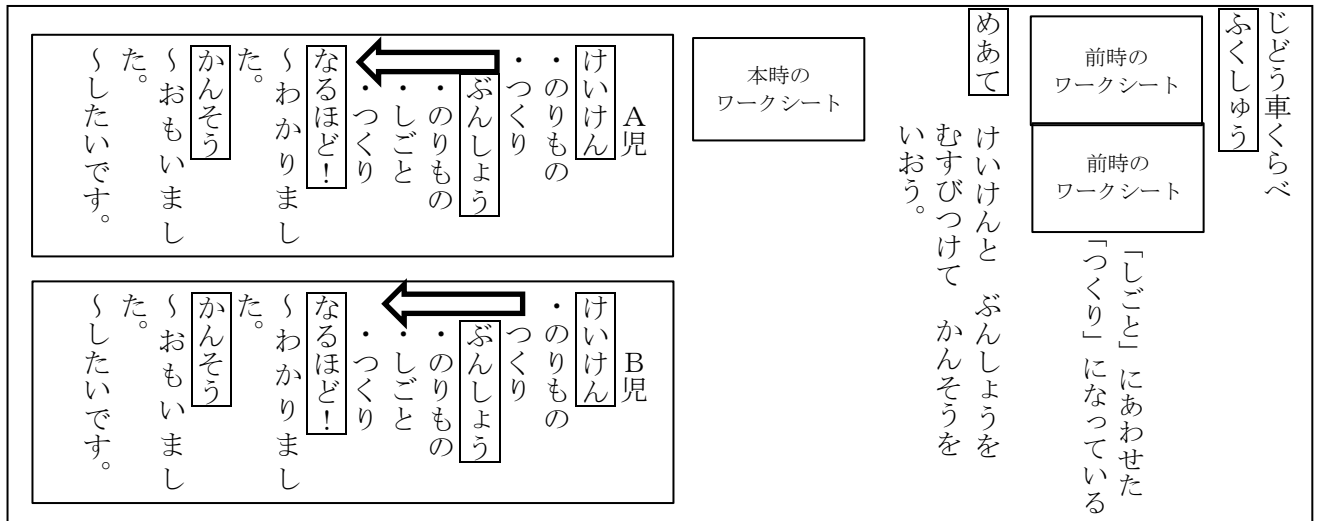
（1）本時の目標

文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつことができる。

（2）学習の展開

学習活動	○指導上の留意点 □主な発問 ・予想される児童の反応 ◆「努力を要する」状況と判断した児童への指導の手立て	評価規準 (評価方法)
○ 前時の振り返りをする。	□前の時間までに分かったことを振り返りましょう。 ○共通点・相違点をまとめたプリントを見ながら振り返る。 ○前時で、自動車は「しごと」にあわせた「つくり」になっていることをおさえる。	
○ 本時のめあてを確認する。	ぶんしょうと けいけんを むすびつけて かんそうをいおう。	
○ 「けいけんしたこと」を話す。	○手話・指文字で言葉の意味を確認する。 □自動車について、経験したことを話しましょう。 ・遠足のときに、バスに乗って、座席がたくさんありました。 ○乗ったことのある「のりもの」と、その「つくり」について話すよう促す。 ◆前時までに用いた掲示物や、児童が乗ったことのある自動車の写真を見せて経験を想起させる。	
○ 「つくり」と「しごと」の関係について考えさせる。	□なぜ、その「つくり」になっているのかな。 ・人が沢山乗るためだと思います。 □人が沢山乗るっていうのは、「つくり」かな。 ・「しごと」です。 ○前時までのプリントの「つくり」と「しごと」の関係に着目させ、「しごと」と結びつけて話すことが出来るようにする。	
○ 「ぶんしょうのないよう」について話す。	□座席が沢山あるのは、人が沢山乗るためだと気づいたのは、文章のどこを読んだからかな。 ・バスや乗用車の説明の部分です。 □では、その「のりもの」と「しごと」と「つくり」を教えてください。	
○ 「なるほど！」について話す。	□「けいけん」した時には、「つくり」は見分かったけど、なぜそうなっているか分からなかったよね。でも、「じどう車くらべ」を読んだら、分かったよね。何が分かったか教えてください。 ・遠足でバスに乗った時は、座席が多いことは見て分かったけど、なぜかは分からなかった。でも、「じどう車くらべ」を読んで、人を乗せて運ぶという「しごと」のために座席がたくさんあるという「つくり」になっていることが分かりました。 ○「つくり」「しごと」「～ために」「分かりました。」という言葉を使って話すよう促す。 ◆指導者が、「なるほど！」の言い方の例を示す。	
○ 「かんそう」について話す。	□最後に、かんそうを言いましょう。 「けいけんしたこと」「ぶんしょうのないよう」「なるほど！」と関係のある感想をいってほしいです。 ・バスの作りをもっと知りたいと思いました。 ○「～したいです。」や「～と思いました。」を使うよう促す。	〔思考・判断・表現②〕 じどう車カード、発言 ・「読むこと」において、文章の内容と自分の体験を結び付けて、感想をもっている。
○ 本時のふりかえりをする。	○本時で考えたことを振り返る。	
○ 次時の見通しをもつ。	○次時では、本時で考えたことを書き、お互いに発表することを伝える。	

(3) 板書計画

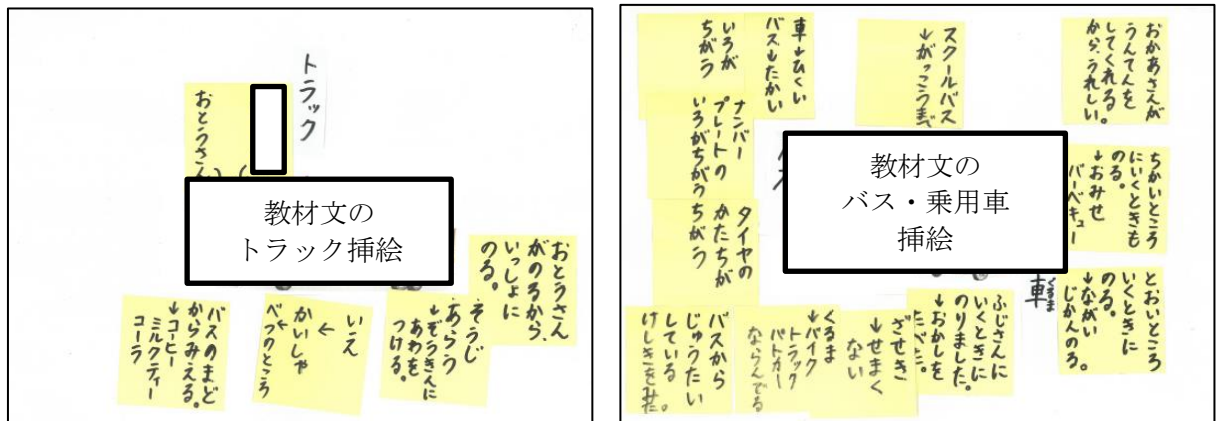


6 指導の実際

(1) 指導上の工夫

① 児童の経験を引き出す工夫

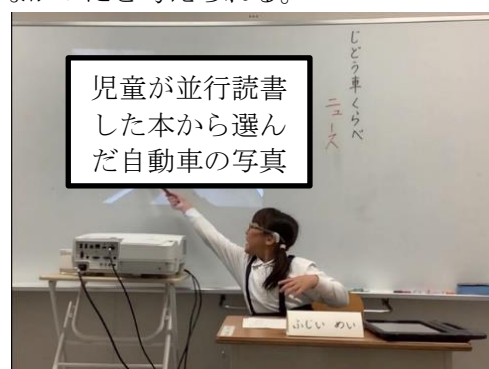
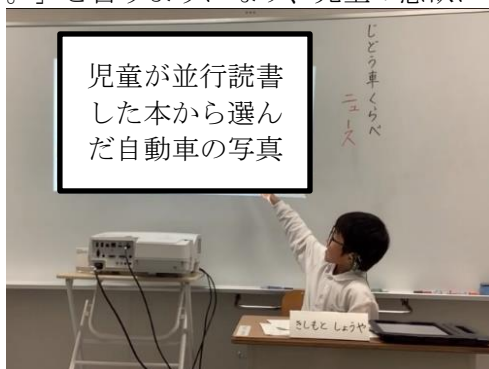
本文の挿絵を児童に見せ、自動車に関する児童の経験を引き出した。経験した内容を付箋に書き、掲示することで、単元を通して経験したことを思い起こしやすくした。



② 言語活動の工夫

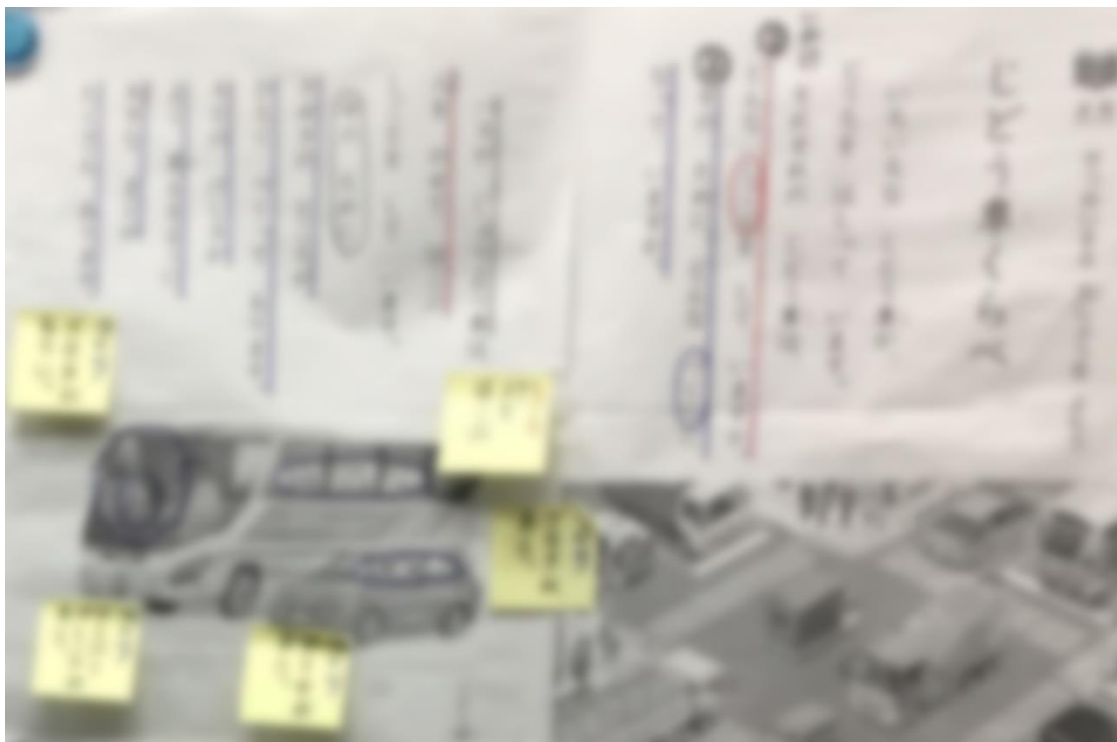
これまでの学習でどのような言語活動を行ったのかを思い出させ、その後本単元における言語活動について考えた。これまで、文学的な文章では劇を行い、説明的な文章ではクイズや図鑑づくりを行っていた。本単元では、クイズや図鑑の他に、自立活動で行った「ニュースをする」という選択肢を作り、児童が「ニュースをしたい。」と言ったため、本単元の言語活動は分かったことや考えたことをニュース形式で発表し合うこととした。

最後に、じどう車カードをニュースのようにして読んだ動画を廊下のディスプレイで流し、他の児童や先生方にも見てもらい、質問をしてもらったり、感想を言ってもらったりしていた。それ以降、「読むこと」における「考えの形成」の学習段階では、「ニュースをしたい。」と言うようになり、児童の意欲につながったと考えられる。



③ 教科用図書の活用

「問い」と「答え」の関係、「しごと」と「つくり」の関係を整理した。「しごと」は赤、「つくり」は青と色分けをして、本文に線を引くことで、本文を見るだけでどこに何が書いてあるのかが分かるようにした。また、挿絵の中の「つくり」の部分にも印を付けて、本文と挿絵を結び付けて考えることができるようにした。



教科用図書を拡大したものに色分けした傍線を引き、想起された児童の経験を付箋で貼ったもの

④ ワークシートの工夫

「しごと」と「つくり」の関係

ワークシートの中心に「しごと」を書き、その周りに「つくり」を書く形にした。さらに、矢印や「そのために」という言葉を書き込むことで、「しごと」のために「つくり」があることが分かりやすくなると考えた。また、「つくり」の枠を多く作っておくことで、本文には書いていない自分が見たことのある「つくり」についても書くことができるようにした。初めは指導者と一緒に取り組んだが、4つ目の自動車については、児童のみでワークシートを書くことができた。

じどう車のなまえ

じどう車へん

トラック

つくり

教材文のトラック挿絵

教材文のトラック挿絵

つくり

つくり

(2) 児童のつまずきと実際に講じた手立ての具体

① 言葉の理解が難しい

日常的に言葉に触れる機会が少ないため、考え聞かせをする際に、言葉の確認を行った。「つくり」の説明では、挿絵のどの部分にあたるか指差しで示すことで、理解を促した。また、「しごと」や「そのために」という言葉の説明は、言葉自体の説明が難しいため、様々な例を挙げて説明をしたり、実際に授業中や他の教科の中でも使ってみたりすることで、理解を促した。

② 書くことに時間がかかる

10(1)④で示した、共通点・相違点を比較するワークシートでは、以前の単元では、本文を書いたり、本文の該当部分を切って貼ったりしていると、その後の比較までに時間がかかってしまった。本文をシールにし、それを表に当てはめて貼る形にすると、比較に多くの時間を使うことができた。

③ 「しごと」と「つくり」を結び付けて考えることができない

「トラックも座席のところが広いほうがいいのではないか。」と問いかけると、「トラックは、人を運ぶ仕事をしているのではなく、荷物を運ぶ仕事をしているから、座席の所が狭くて、荷台が広いつくりになっている。」と「しごと」と「つくり」を結び付けて答えることができた。

④ 本の文章から「つくり」や「しごと」を抜き出せない

児童は、自分たちで乗り物に関する本から「しごと」と「つくり」を探してワークシートに記入していった。「しごと」に関しては、文章から読み取りやすかったが、「つくり」に関しては、書いてある部分が多くただ書き写すだけになってしまっていたため、自動車のどの「つくり」について説明したいのか写真を指差しを考えさせた。本の写真では分かりにくい「つくり」については、iPadで写真を調べて、指差しして考えさせることができた。

⑤ 経験と結び付けられない

児童が乗ったことのある自動車の写真を見せたり、見たことのある自動車をiPadで調べて写真を見付けたりすることで、写真を見ながら「つくり」を見つけだすことができた。

⑥ 手話で話したことを文章にできない

考えを手話で話す様子を動画に撮り、その動画を自分で見ながら文章を書くことができた。



7 評価の実際

(1) 評価の具体

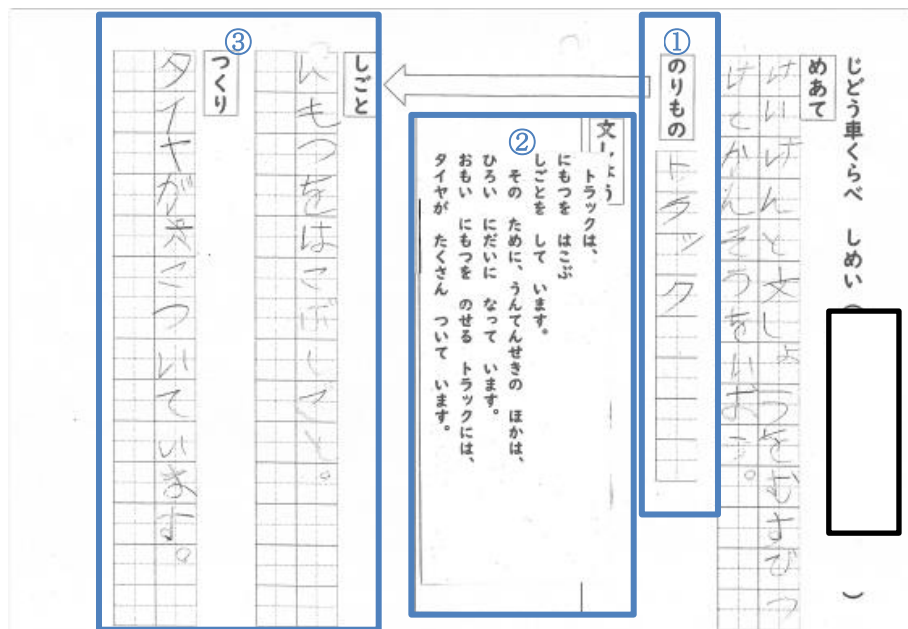
- ① 乗ったことのある自動車を想起することができる。
 - ② 経験と共通する部分のある文章を選び出すことができる。
 - ③ 乗ったことのある自動車の「しごと」と「つくり」を見付けることができる。
 - ④ 結び付けたことで内容理解が深まっている。(なるほど)
 - ⑤ 解釈したことをもとに感想をもつことができている。(かんそう)
- 以上の5点ができている児童を「おおむね満足できる」状況(B)とした。
①～③はワークシートで、④⑤は発言で評価した。

【「おおむね満足できる」状況(B)の児童①】

児童が乗ったことのある乗用車の「しごと」を考えた時に、車に座席の荷物を載せた経験から人を乗せて運ぶ「しごと」と荷物を運ぶ「しごと」と発言した。解釈する場面で、「しごと」と「つくり」の関係について、児童が乗ったことのある乗用車の「しごと」は、荷物を運ぶ「しごと」ではなく、人を乗せて運ぶ「しごと」と発言することができた。児童と指導者の会話は、以下の赤い吹き出し内の通りである(赤字は評価の対象とした発言)。

【「おおむね満足できる」状況（B）の児童②】

本文と経験を結び付ける場面では、本文に似た経験を言うことができても、本文と全く同じ「つくり」と「しごと」を言うだけで、解釈して感想を言うことは難しかった。指導者が自動車のイラストを描き、イラストを示しつつ「しごと」は何か、そのためにどのような「つくり」になっているかを改めて確認すると、「しごと」と「つくり」を結び付けて解釈し、感想を言うことができた。



④	なるほど (発言)	トラックは、にもつをはこぶしごとをしています。そのために、タイヤが6こついていきます。タイヤがすくなく、にもつがおもくてはこべないから、タイヤが6こついていきことがわかりました。
⑤	かんそう (発言)	ほかのトラックはタイヤがなんこかわからないので、iPad や本を見て調べてみたいです。

(2) 児童の評価

本単元を終えて、「おおむね満足できる」状況（B）の児童が2名であった。

8 成果と課題

(1) 成果

これまで、文学的な文章を読む際に、文章の内容と似た経験を話すことはあったが、解釈して感想をもつまでには至らなかった。しかし、「じどう車くらべ」では、文章と経験を結び付けて解釈し、感想をもつことができた。本単元では、本文の内容を整理しまとめる段階では、本文に登場する自動車の「しごと」や「つくり」については理解できているが、「しごと」と「つくり」の関係については理解できていなかった。児童自身の経験と結び付けて考えさせることによって、「しごと」のために「つくり」があるということを児童の経験を基に説明することができた。そのためには、児童の経験を想起させる必要があり、児童が実際に乗ったことのある自動車の写真を提示するなどの方法は効果的であったと考えられる。

(2) 課題

本単元の指導を経て、改善を図りたい点は次の3点である。

1点目、本文の内容理解と、本文と児童の経験を結び付けることは同時に行う必要があったと考える。本文の読み取りでは、児童の経験とは結び付けず、本文にある言葉の意味理解や、文章の意味を理解すること、文章と文章を比べることに重きを置いてしまった。そのため、自動車の共通点と相違点を表にまとめる際には、文と文を見比べて共通点や相違点を見付けたが、自動車のどの部分のことなのか、なぜ相違点があるのかが理解できていなかった。そのため、比較する際にも、挿絵を用いてどの部分の説明をしているのかを示したり、実際に乗った自動車の写真を見て、なぜそのような「つくり」になっているのか考えさせたりする必要があった。

2点目としては、「しごと」と「つくり」の関係を考えさせるときには、「しごと」があり、そのための「つくり」は何かという流れで考えさせるほうが良かったのではないかと考える。本時では、「つくり」を先に見せて、なぜそのつくりになっているのかは、「しごと」があるからという流れで考えさせていた。バスや乗用車の「つくり」で「ぎせきのところがひろくつくってある。」のはなぜかを考えさせた時に、「狭いと、人が座った時にきついから。」と答えた。経験に基づいて理由を考えることができているが、「人をのせてはこぶ」という「しごと」と結び付けて考えることはできていないように感じた。「人をのせてはこぶ」という「しごと」のために、どのような「つくり」があるのかを考えさせる時に、「ぎせきのところがひろい」「にだいがひろい」などの選択肢を与え、その理由を答えさせるという方法だと「しごと」と「つくり」を結び付けて考えさせることができたように感じた。

3点目、考えの形成では、例文を示す方が良かったと考える。指導者が例文を見せることによって、あまり考えず同じように書く可能性を考え、例文を見せず、語尾や話す内容を短冊に書いて示していた。しかし、短冊のみでは、どのような内容をいったらいいのかが分からず、うまく説明することができていなかった。例文を示し、「先生だったらこうだけど、二人はどう？」と問いかけつつ考えを引き出すという方法も考えられる。

(3) 今後に向けて

本学級の児童2名は、本単元を通して、文章を読んで考えを形成するとはどのようなことか分かってきたようである。今後も繰り返し指導することで、文章と自分の経験を結び付けて考える力を身に付けさせたい。

また、経験と結び付けて解釈することの大切さを感じた。今後、文章を読解していく際にも、児童の経験を結び付けつつ読み進められるように留意していきたい。また、日常的な会話で児童が話した経験を授業で取り上げたり、経験したことのないことは可能な範囲で経験させたり、文章に結び付けられる経験を想定したりするなど、文章と経験を結び付けるための工夫をしていきたいと感じた。

付録 選書リスト

書名	著者名	出版社名
くらべるしらべるずかん はたらくじどう車	元浦 年康 (監修)	あかね書房
はっけんずかん のりもの 改訂版	西方 拓史 (絵) 大山 昌夫 (監修)	G a k k e n